

生きづらさ万歳！

私の居場所はここにある

講師 雨宮 凜さん (作家)
インタビュアー 佐藤香代さん (弁護士)



さまざまな生きづらさを抱えている人たちに寄り添い、発信を続けてきた雨宮凜さんにお話をうかがいました。

聞き手は、弁護士として、困難な状態にある人たちに関わり続けている佐藤香代さんです。

生きづらさは、自己肯定感が持てないこと

生きてるのが大変

この11年間、主に貧困や格差、生きづらさという問題について書いてきました。就職氷河期に社会に出た私自身のフリーター経験が大きいです。「なんで私たちはこんなにも生きることが大変で、こんなにも自分が生きていることが申し訳なくて、迷惑をかけてすみませんと言いつつ死んでいかなくちゃいけないんだろう」と思った

状況の当事者に向けられています。この構図も、日本で有権者教育がなくて消費者教育しかないことが関わっています。いかに消費者マインドから脱却するかを意図的にやっていたら、この暴力は終わりません。私たち日本人も時には国に怒っていいんです。

怒りと自己肯定

怒りにも自己肯定感がなくて、「価値があるはずの自分が、なぜ不当な扱いを受けなければならぬのか」と思えないと怒れません。若い世代は「社会のせいにするな。卑怯者」と言われ続け、困難な状況を社会問題ではなく100%自分の責任と思込まれています。そういう人に「怒れ」と言うと、怒りすべてが自分に向かい、自傷行為やリストカット、自殺にまで追い詰められてしまいます。

迷惑をかけあえる関係づくり

無職の人も多いフリーター労組に入っていますが、ここでは「働け」とか「だめなやつ」とは誰も言いません。「無条件の生存の肯定」、それが運動のスローガンです。「無条件で、無理矢理でも肯定してい

のが問題意識の原点です。

若者が自ら命を絶つこと

労働法制の規制緩和が進み、雇用が不安定化しました。その上に長時間労働、低賃金です。どの国でも、特に若年層に貧困化が及んでいます。若者に働く気がないという問題ではありません。それを自己責任とされ、追い込まれた20代、30代の死因の第一位は自殺という状態が続いています。

不幸比でも我慢大会もやめよう

ただいま動画で、エキタスというグループのデモの様子を見ていただきましたが、そのスピーチの言葉が「不幸比でも我慢大会ももういい加減に終わりにしませんか」でした。貧困について社会の認識は進み

い」と、自分を肯定できると他人も肯定できるのです。

人を助けたり、支援する活動を継続的にしていると、自分の個人的なセーフティネットが分厚くなっていく感じがします。迷惑かけられた分、私も頼っていいからというふうには、それは当たり前人間関係はずです。この数十年、迷惑は業者にお金を払ってアウトソーシング(外部委託)するものになり、助け合いの層があまりに薄くなっています。普段からちよっとした迷惑をかけ合ったり、助け合ったりということをしていけばいいと思うのです。

「助けて」と言う「助けて」と言われる

ところが「助けて」というためには、二つのハードルがあつて、一つは自己肯定感の欠如です。自分が価値がない存在だと思っていれば、言えません。さらに二つ目は「この世の中はそんなに捨てたものじゃないかもしれない」という社会への最低限の信頼感がなければ、声を上げられません。それを日本の社会はことごとく裏切っています。いじめの現場でも共通しています。困っているという目には、困っている誰かに「助けて」と

ましたが、同時に貧困バッシングも起きています。すべてのことを、問題を抱えている個人の甘え・自己責任にして、政府も世間も、解決のために何もしないことを正当化しています。

エキタスは、最低賃金1500円を掲げて2015年から活動しています。彼らがツイッターで、「もしい、1500円になったらどうしたいか？」と問いかけた時、一番多かった回答が「病院に行きたい」でした。他には「もやしと鶏肉以外のおかずが食べられる」などがありました。貧困はグローバル化と関連しています。対抗するには世界と連携しなければという意識で、エキタスはアメリカの運動に呼応して活動しています。

弱い立場の人がより弱い立場の人に暴力を向ける傾向

相模原の事件(*注)の被告、彼自身も弱者的要素があります。殺人によって「役に立つ」自分をアピールする、生産性・利益至上主義思想の究極に行き着いた最悪の事件でした。こうしたねじれ、弱者が弱者に向ける暴力は、ネット上でもどこでも溢れています。フェミニズム運動が盛り上がりつつある韓国の場合は、怒りが国のほうに向きました。日本の場合も、運動している人や、貧困や困難な

言ってもらえるかと考えたなら、振る舞いが変わります。日頃のすべての言動が問われているので、誰にも「助けて」と言われていない人は、自分を振り返ってみてほしいというメッセージを送りたいと思います。

(注) 相模原事件
2016年7月26日未明、神奈川県相模原市にある知的障害者福祉施設「津久井やまゆり園」で19人が殺害され、27人が重軽傷を負った事件。



☆もっと詳しく知りたい方は、はばたき21情報コーナーにある「フォーラム記録集」をご覧ください。

来場者の感想

来場者のうち、63名の方にアンケートの回答をいただきました。

回答者の年代	
・20代	4名
・30代	3名
・40代	10名
・50代	16名
・60代	13名
・70代	6名
・80代	6名
・無記入	5名
計63名	

- ・「無条件の生存の肯定」という言葉が心に残った。
 - ・「安心・自信・自由」がなぜ叶わないのか。
 - ・弱者のことを知らなかった。
 - ・「助けて下さい」と言っていたんだと思った。
 - ・生きるには、お互いに迷惑をかけ合うのが当たり前のこと。
 - ・他人のために何かすることは尊いこと。誰かの需要に応えたい。
 - ・弱者の立場に軸を置いて考えるという言葉が印象的。
 - ・SOSをキャッチできる人でありたいと感じた。
 - ・居場所を見つけることが大切。
 - ・男女平等は必要。結婚にも同様。
 - ・地域で虐待を減少させたい。
 - ・様々な課題があり、相互に影響していると感じた。
 - ・世の中の動きに目を向けることの必要性を感じた。
 - ・性別・雇用環境・社会の風潮・政治の偏向に光を当て打開の方向性を示すことが必要。
 - ・悩みを持ち合える場が必要。周知させるシステムも重要。
 - ・公的な支援が厚くなるべき。国や政治、社会が変わらなないといけない。
 - ・現実を目を向ける大切な時間になった。
 - ・勝つことや付加価値を持つことにとらわれず、強く柔軟に生きて幸せになることを目指したい。
 - ・皆が生きやすい世の中になって欲しい。
 - ・こういう話はもっと多くの人に知ってもらいたい。貧困は他人ごとではない。
- この講演で、想像以上に厳しい現実を知ることになりました。自己肯定感を持ち、それでも生きづらさを感じた時には声を上げ、その一方で、その声をキャッチできる人が増えていくと、皆が生きやすい社会に近づけるのではないかと思います。